

## 南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴

新 田 哲 夫

### 1. はじめに

南琉球多良間方言のアクセントについては、平山（1964）をはじめとし、平山・大島・中本（1967）等の研究で扱われてきたが、2010年以降、研究が急速に進展を遂げた。平山らの研究では、多良間方言を含めた宮古諸方言のアクセントは、型知覚のある「二型アクセント」あるいは「一型アクセント」、型知覚のない「崩壊アクセント」に分類されていたが、Matsumori（2001）、松森（2010）によって多良間方言のアクセント体系は明確な「三型アクセント」であるとの報告がなされた。そのことがきっかけとなり、2010年代になって研究の数が増え、この方言の仕組みが徐々に明らかになりつつある（松森 2010, 2014, 2016a, b, c, 青井 2012, 2015, 2016a, b, c, 2017, 2018a, b, 五十嵐 2015, 2016, Matsumori 2017）。これらの研究からは、本土諸方言には見られない韻律的単位、キーとなる韻律的特徴が存在し、本土方言の常識に捕らわれない独自の視点が必要であることが示唆されている。また多良間方言以外の方言についても「三型アクセント」が存在することが明らかになり、南琉球は「三型アクセント」の集中する地域である可能性が高くなっている。

筆者は、多良間方言アクセントに関するこれまでの先行研究の各成果を踏まえながら、また、自身の調査結果に基づき、2018年以降いくつかの口頭発表を行ってきたが、この論考ではこれまでの考えを再考した部分も含め、改めてこの方言アクセントの解釈についてまとめようと思う。この方言アクセントの要である「アクセント低核」の用語と概念は、2018年の口頭発表で初めて用いたものだったが、別の研究成果でもその用語は使われ始めており（渡久山・セリック 2020, セリック 2020a, 松森 2022）、またそれに対する批判（青井 2019）もあるので、この機会にこの方言の韻律語の核に関する私見を述べることにする。さらに南琉球のアクセント研究者の間では、すでに韻律語を用いた分析が主流となっており、また「アクセント核」の用語も使われているが、「アクセント核」については、筆者の考え方と必ずしも同一とは言えないので、この論考では、「アクセント核」を使った方向観に基づく立場、すなわち音調変動を動的に捉える立場を明確にして、多良間方言のアクセントをどう捉え、解釈するかを伝えたいと思う<sup>1</sup>。

## 2. 多良間アクセントの概要

この方言のアクセント体系は、「三型アクセント」体系であり、「韻律語」と呼ばれる南琉球に特有な韻律単位を設定することによってうまく分析できることが、これまでの研究で明らかになっている（松森 2010, 2014, 五十嵐 2015, 2016, 青井 2016 他）。この方言では「韻律語」が二つ以上並ぶとき A 型 B 型 C 型の三つの型の区別が現れる。のちに述べるように、筆者は「韻律語」を、A 型 B 型 C 型の指定を受ける「主韻律語」と型の指定を受けない「副韻律語」とに分けて考える。

多良間方言のアクセントの弁別特徴は、2010 年代の始め、HL (High-Low) の「下降」であると見なされてきたが、LH (Low-High) の「上昇」もまたアクセントの実現であるという認識が現れた（松森 2016, 青井 2018a）。筆者の見解では、有核の韻律語の末位モーラが常に低く(L)なる「アクセント低核」(...L<sup>v</sup>)を設定することで下降と上昇の両方を説明できるとした（新田 2018, 青井 2019 も同様の結論を得ている）。

多良間方言の韻律語には、環境的変異として韻律語全体が高いトーンの「High 韻律語 (H 韻律語)」と低いトーンの「Low 韻律語 (L 韻律語)」を設定しうる。また、韻律語には核をもつ有核の韻律語と核をもたない無核の韻律語があり、「H 韻律語」と「L 韻律語」それぞれで有核と無核の韻律語が対立している。主に韻律語の有核・無核の設定だけで音調型を予測し記述していこうとするのが、この論考の眼目でもある。多良間方言の有核の H 韻律語（「H 有核」）は下降を伴い、有核の L 韻律語（「L 有核」）は上昇を伴う。以下の小節では、それぞれの特徴について詳しく述べる。

### 2. 1 三型アクセント体系

「三型アクセント」は「N 型アクセント」の一種で「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数 (N) 以上に増えていかない体系」（上野 2012: 45）のうち、N=3 のものをいう。本土方言では、島根県隠岐諸島のうち隠岐島、西ノ島の諸方言（広戸・大原 1953）、福井県嶺北地方の沿岸部に「三型アクセント」が分布しているのが知られている（新田 2012, 松倉・新田 2016, 松倉 2016, 2018, 2022 他）。琉球諸語では喜界島から最西の与那国島まで広い範囲で分布している。南琉球では三型アクセントの発見が相次ぎ、この地域は「三型アクセント」の群落地と目される（多良間方言: 松森 2010 他, 水納島方言: セリック 2020b, 池間方言: 五十嵐他 2012, Igarashi et al. 2017, 与那覇方言: 松森 2013, 狩俣方言: 松森 2015, 八重山黒島方言: 松森 2016b, 波照間方言: 麻生・小川 2016, 与那国方言: 上野 2010 など）。

多良間方言の三型アクセントのそれぞれの型は、これまでの例にならって、A 型 B 型 C 型で表す。(1) に前もって三型体系の枠組みを示す。本土方言の三型アクセントは、いわゆる「文節」がアクセントパターンの単位、すなわち単語声調の単位となっているが、宮古諸島の諸方言は、のちに述べる「韻律語」の並びが重要である。以下、「韻律語」を ( )

に入れて示す。この方言の弁別特徴である「アクセント低核」は、「核の置かれたモーラを低くする」ものであるが、これについてものちに詳述する。以下、 $\mu$  は任意のモーラ、 $\mu^v$  は「アクセント低核」のあるモーラを表す<sup>2</sup>。

(2) では文頭に現れた文例に音調記号を付し、下の段では韻律語とアクセント核を使って示す。文頭の (2) の例からは、多くの本土方言に見られるような「下げ核」を設定すれば済むように見えるが、文頭ではない文中に入った場合は、異なる実現の仕方をする。(2) の下段の韻律語に付している「アクセント低核」が必要な理由はのちに述べる。

(1) アクセント低核をもつ三型体系（暫定版）

- A 型 (... $\mu$ ) (... $\mu$ ) 無核。  
 B 型 (... $\mu$ ) (... $\mu^v$ ) 2 番目の韻律語の末位にアクセント低核。  
 C 型 (... $\mu^v$ ) (... $\mu$ ) 1 番目の韻律語の末位にアクセント低核。

(2) 文頭（単純語-助詞、複合語-助詞）の例<sup>3</sup>（miiraiL 《見える》が続いた例）

- |     |  |   |
|-----|--|---|
| A 型 | <b>[kuba=mai]</b> ... 《クバも...》<br>(kuba) (mai)...                | <b>[kuba+gii=mai]</b> ... 《クバ木も...》<br>(kuba) (gii) (mai)...                |
| B 型 | <b>[mami=ma]</b> i... 《豆も...》<br>(mami) (mai) <sup>v</sup> ...   | <b>[mami+gi]</b> i=mai... 《豆木も...》<br>(mami) (gii) <sup>v</sup> (mai)...    |
| C 型 | <b>[ada]N=mai</b> ... 《アダンも...》<br>(adaN <sup>v</sup> ) (mai)... | <b>[ada]N+gii=mai</b> ... 《アダン木も...》<br>(adaN <sup>v</sup> ) (gii) (mai)... |

## 2. 2 韻律語

南琉球諸方言のアクセント分析には、本土方言の「語」、「文節」とは異なる「韻律語」が分析上有効な韻律的単位であることが明らかになり、それに基づく分析が進んでいる。「韻律語」を設定する理由の根拠となる例を (3) にあげる。B 型の **mami** 《豆》を含む文節に注目してほしい。

(3) B 型の現れ方

- |                           |           |                                |
|---------------------------|-----------|--------------------------------|
| a. <b>[mami=ma]</b> i     | mii-rai-L | 《豆も見える》<br>豆=も 見る-可能-非過去       |
| b. <b>[mami=ka]</b> ra    | nii-bu-L  | 《豆から煮ている》<br>豆=から 煮る-継続-非過去    |
| c. <b>[mami=kara]</b> =du | nii-bu-L  | 《豆から煮ている》<br>豆=から=焦点 煮る-継続-非過去 |

- d. [mami=ga]mi=mai      nii-bu-L 《豆までも煮ている》  
     豆=まで=も            煮る-継続-非過去
- e. [mami+gi]i=mai        mii-rai-L 《豆の木も見える》  
     豆+木=も            見る-可能-非過去
- f. [mami+gi]i=gami=mai    mii-rai-L 《豆の木までも見える》  
     豆+木=まで=も      見る-可能-非過去
- d'. ×[mami=gami=ma]i...    《豆までも...》
- e'. ×[mami+gii=ma]i...      《豆の木も...》
- f' ×[mami+gii=gami=ma]i... 《豆の木までも...》

東京方言などの本土方言では、「文節」、すなわち名詞単独、単純名詞-助詞、複合名詞-助詞等が一つの単位となり、文節内のどこにアクセント核が置かれるかが問題となる。それに対して、当方言の (3) を見ると、助詞 mai 《も》, kara 《から》, gami 《まで》, 助詞連続 karadu 《からぞ》と複合語後部要素の gii 《木》が韻律上、同じ振る舞いをし、文節単位の見方から予想される (3d', e', f'), のような形は現れない。これらの例から、自立語 mami 《豆》の韻律特徴として、mami の次に来る助詞、複合語後部要素の形式に、音調の下がり目が現れるとした方がよい。ただし、(3c) にある 1 モーラの du は kara に接続して韻律上の単位として一かたまりになる。以下の (4) で示したように、ここで用いられた 2 モーラ以上の形式、およびそれが接続する自立語を「韻律語」と呼び、今後の韻律分析の単位に使用することにする。

- (4) B 型 mami 《豆》とそれに続く「韻律語」
- a. ([mami] (ma)i)...        《豆も...》
- b. ([mami] (ka)ra)...      《豆から...》
- c. ([mami] (kara)du)...    《豆からぞ...》
- d. ([mami] (ga)mi) (mai)... 《豆までも...》
- e. ([mami] (gi)i) (mai)...    《豆の木も...》
- f. ([mami] (gi)i) (gami) (mai)... 《豆の木までも...》

韻律語は原則、2 モーラ以上で形成される (五十嵐 2015)。この方言にある 1 モーラ助詞の nu 《が・の》, a 《は》, tu 《と》, u~ju 《を》などは、それが付く語と一体となって一つの韻律語を形成するのに対し、2 モーラ以上の助詞 mai 《も》, kara 《から》, gami 《まで》, teeN 《ばかり》はそれ自体で一つの韻律語を形成する。こうした韻律語の形成法は、Shimoji (2009) の伊良部方言で示された 2 モーラ 1 フットの韻律単位、(あるいは 3 モーラ 1 フットとする韻律単位 (松森 2013)) の存在と関わりがあると考えられる。おそらく、宮古諸方

言では広くそうしたフット構造が韻律を担う単位として機能しており、多良間方言の「韻律語」も、高低の音調実現には2モーラ以上必要という原理と同種のものであろう。

筆者は、「韻律語」を、A型B型C型の各型の指定を受ける「主韻律語」と型の指定を受けない「副韻律語」とに分ける。「主韻律語」は形態論的には名詞語根、動詞語根、形容詞相当語根、副詞などが該当する。「副韻律語」は2モーラ以上の助詞、助詞連続、動詞等に付く2モーラ以上の接辞、複合語の後部要素などがそれに該当する<sup>4</sup>。(5)に列挙する。

(5) さまざまな韻律語 (斜体は副韻律語)

- a. (tarama) 《多良間 [地名]》, (kaki) 《書く》, (miiL) 《見る》
- b. (kaki) (taL) 《書いた》, (mii) (raiL) 《見られる / 見える》, (katamii) (butaL) 《運んでいた》
- c. (imi) (sjaal) 《小さい》, (imisja) (daal) 《小さい [強調]》
- d. (tarama-nu) 《多良間が、の》, (taramo-o) 《多良間を》
- e. (tarama) (mai) 《多良間も》, (tarama) (kara) 《多良間から》, (tarama) (kara-du) 《多良間からぞ》
- f. (tarama) (Msju) 《多良間味噌》, (adaN) (gii) 《アダン木》, (Msju) (gami) 《味噌甕》
- g. (adaN) (gii-nu) 《アダン木が/の》, (Msju) (gami-u) 《味噌瓶を》, (adaN) (gii) (mai) 《アダン木も》

## 2.3 韻律語のミスマッチ

韻律語は、それ自身が備えている形態的特徴から一義的に決定されるのではない。自立語語根はそのまま韻律語になることがほとんどだが、語の長さが長い場合に韻律上のリズムを優先し、歴史的な由来から離れて複数の韻律語に分けられることがある。その際、形態素境界と韻律語境界が異なるミスマッチが生じることがある。

(6) 形態素境界と韻律語境界の不一致

- a. [mju]utura=mai (mjuu<sup>v</sup>) (tura) (mai) 《夫婦も》 (五十嵐 2015: 24)
- b. [u]tudara=mai (utu<sup>v</sup>) (dara) (mai) 《兄弟も》 (五十嵐 2015: 24)
- c. [rak]kjoo=mai (rak<sup>v</sup>) (kjoo) (mai) 《辣蕓(らっきょう)も》 (五十嵐 2015: 24)
- d. [sjiN]gapooru=mai (sjiNga<sup>v</sup>) (pooru) (mai) 《シンガポールも》 (筆者の例)

(6a), (6b) の語源は、おそらく mjuutu-ra, utudu-ra と切れるが<sup>5</sup>、韻律語の切れと一致しない。(6c)も漢語要素からなるが形態的境界については明確ではない。(6d) のシンガポールは6モーラの地名で通常形態素境界はない。韻律語に下降が生じる場合は、韻律語末が低くなることから、(6d) のように韻律語を2単位に割って考えるしかない。

一方、形態上の独立性が低い接辞が一つの韻律語になる場合がある。過去を表す形態素 taL は接辞で形態的な自立性は低い、それ自体で韻律語となると考えられる。以下の (7) はセリック (2020a: 28-29) の例である。表記法は本論に合わせて変更した。ここでは韻律語の中に音調表記と核表示を同時に行う。

(7) セリック(2020a)の有核動詞「決める」の活用形

- a. ([kimi]L<sup>v</sup>)           《基本形：決める》
- b. ([kimi]da<sup>v</sup>) (taL)   《過去否定形：決めなかった》
- c. ([kimi]da<sup>v</sup>) (taM)   《過去否定 m 語彙形：決めなかった》
- d. ([ki]mi<sup>v</sup>) (zi<sup>i</sup>)      《意志形：決めよう》
- e. ([ki]mi<sup>v</sup>) (maN)     《意志否定形：決めないでおこう》
- f. ([kimi] (ta)L<sup>v</sup>)      《過去形：決めた》

(7b), (7c)の例から、(taL) と (taM) が抽出でき、(7d), (7e)からそれ以外の接辞も抽出できる。そうならば (7f) の taL も独立した韻律語と見なせるという論理である<sup>6</sup>。ここから、セリック (2020a) は、(7f) の語幹 (kimi)を B 型、他の(7a)~(7e) の語幹を C 型と見なし、B~C の型の交替を認めている。これについては賛同する。

1 モーラ語根の bu-《居る》に付く場合は (5b) ([katami]i<sup>v</sup>) (butaL) 《運んでいた》の例のように、語根 bu-と接辞 taL が一つになり韻律語を形成すると考える。語根の形態的独立性から (bu) (taL) の (bu) のように 1 モーラ韻律語を認めるよりも、一塊になって音調変動をもたらす表層をそのまま受け入れる立場をとる。(taL) に関連して例外となるのは、(bu-taL) の他、(si-taL) 《した》、(a-taL) 《あった》の 1 モーラ語根をもつ過去形である。

さらに、サアリ系形容詞接辞の sja の場合も、(5c) で示したように、語根の次にくる接辞の側に含まれる場合もあれば、(([i]mi<sup>v</sup>) (sjaaL) 《小さい》)、語根に接続して韻律語を形成する場合もある (([i]mi]sja<sup>v</sup>) (daaL) 《小さい [強調]》)。

以上まとめると、韻律語の切れ方・まとめり方は、形態的情報によってのみで確定されない場合がある。韻律語の形成法は、2 モーラ以上が韻律語になるという韻律形成上の原則を守りながら、主韻律語のアクセントの型とそれに付属する副韻律語のモーラ数で調整が働くと予想されるが、今のところ全てを説明する定式化には至っていない。

## 2. 4 副韻律語

筆者が「主韻律語」のほかに「副韻律語」を設定する理由は、主に B 型の実現に関連している。

A 型と B 型の音調は、助詞で独立した韻律語 (mai) 《も》とともに現れる場合、対立するが、1 モーラの助詞 nu が付く場合、対立がなくなる。(2)でみた B 型の「2 番目の韻律語

に下降がある」というのは、「韻律句」（実際は文節）というドメイン内でしか音調型が実現しないと見なされている（例えば五十嵐 2015, 青井 2016）。すなわち、韻律句を{ }で表すと、{(mami) (mai)}は「韻律句」（文節）内に二つの韻律語があるため、2 番目に下降が現れるのに対し、mami=nu は{(maminu)}と韻律句内に一つしか韻律語がなく 2 番目の韻律語がないので“中和”するとされてきた。(8)は述語の A 型の(narabi)《並ぶ》, C 型の neeN 《ない》が mai 《も》, nu 《が》に続く例である。上段は音調を表し、下段は韻律語と核表示を行っている。“中和”は下線部である。B 型に 1 モーラ助詞 nu が接続して一つの韻律語を形成したとき A 型との対立がなくなり“中和”が起こる。

(8) B 型と A 型の“中和”

A 型	B 型	C 型
a. [kuba=mai narabi (kuba) (mai) (narabi)	[mami=ma]i narabi ([mami) (mai <sup>∇</sup> ) (narabi)	[ada]N=mai narabi (adaN <sup>∇</sup> ) (mai) (narabi)
b. [kuba=mai nee]N (kuba) (mai) (neeN <sup>∇</sup> )	[mami=ma]i neeN (mami) (mai <sup>∇</sup> ) (neeN <sup>∇</sup> )	[ada]N=mai neeN (adaN <sup>∇</sup> ) (mai) (neeN <sup>∇</sup> )
c. [kuba=nu narabi (kubanu) (narabi)	[mami=nu narabi (maminu) (narabi)	[ada]N=nu narabi (adaNnu <sup>∇</sup> ) (narabi)
d. [kuba=nu nee]N (kubanu) (neeN <sup>∇</sup> )	[mami=nu nee]N (maminu) (neeN <sup>∇</sup> )	[ada]N=nu neeN (adaNnu <sup>∇</sup> ) (neeN <sup>∇</sup> )

しかしながら、B 型の音調実現は、韻律句内の 2 番目の韻律語を規定するだけではなく、韻律句を越えた次の自立語に影響する。それは、先んじて言えば、[kinu]u=kara... (([kinu]u<sup>∇</sup>) (kara)... 《昨日から...》) の後に続くような、すなわち音調が低下したあと、そのまま低く始まる文中において見られる現象が問題となる。((9)の中の「低く始まる文中」の例を参照)。

(9) 文中で上昇を伴う B 型の例

文頭	低く始まる文中	韻律語と核で表示
[mami=ma]i narabi	...mami=mai[ narabi	(mami) (mai <sup>∇</sup> ) (narabi)
[mami=ma]i neeN	...mami=mai[ nee]N	(mami) (mai <sup>∇</sup> ) (neeN <sup>∇</sup> )
[maminu narabi	...mami=nu narabi	(maminu) (narabi)
[maminu nee]N	...mami=nu neeN	(maminu) (neeN <sup>∇</sup> )

(9)の「低く始まる文中」の例に、韻律句、韻律語、アクセント核、音調記号をすべて記して表せば、{([kinu]u<sup>∇</sup>) (kara)}{(mami) (mai<sup>∇</sup>)} {(nababi)}《昨日から豆も並ぶ》, {([kinu]u<sup>∇</sup>) (kara)}{(mami) (mai<sup>∇</sup>)} {(neeN<sup>∇</sup>)} 《昨日から豆もない》のようになる。低く始まる

mami=mai 《豆も》の韻律句（文節）は、当該韻律句を越えて次の韻律句の韻律語（narabi）, (neeN) の部分を上げる働きをもっているのである。

## 2. 5 アクセント低核

一般に「アクセント核」は、下降、上昇等、音調変動に変化に注目して、その変化の始まりや終点をモーラや音節などその方言で核を担える「拍」（上野 2006: 2）に設定されるものである。アクセント核の音調上の特徴は方言によって決まっており、下降なら下降が、上昇なら上昇が一つの単語などの「韻律単位」のなかで際立って現れる。アクセントの弁別特徴は、その一貫した音調変動の際立ての様式をいう。音調の際立てに、次の拍を下げるという下降が使われれば、そのアクセント核は「下げ核」、次の拍を上げるという特徴が使われれば「上げ核」と呼ばれる。アクセント核は文の始まりであれ、文中であれ、環境を問わず不変に現れる音調の特徴をマークするものである。アクセント核を有する一定の形式は「有核」と呼ばれ、その形式の中で特有の音調変動をもたらすが、アクセント核がない「無核」はその変動がその形式内にないことを示すだけで、接続する「無核」の形式は前の音調をそのまま引き継ぎ、話線の流れに従って進むことが多い。ある方言の韻律を動的に捉えようとする「アクセント核」の考え方は、一つ一つのモーラや音節ごとに H, L といったあらかじめ用意されていたラベルを付与していく考え方は一線を画す。「アクセント核」は音調変動を捉えて、その場所をポイントとして指し示すだけである。すなわち「核」は本来、H や L という高さを持つものでもないし、また HL の H と L の組み合わせで右隣の拍の高さを L としてセットで指定するものでもない。

しかしながら、以下に述べるように、本論で取り上げる多良間方言のアクセントを動的に捉えようとする際に、弁別的な特徴として上昇と下降の二つの特徴が出現する二面性をもつ。二つの特徴を合一して示そうとするとき、「アクセント低核」の L という静的な指定が必要になってくる。ただし、その「低核」の L の位置指定は、H からその L に至る音調変動をもたらす終点、あるいはその L から H が始まる音調変動をもたらす起点の指定になっていることに留意すべきである。すなわち「低核」は音調変動から導き出された結果を統合したものにすぎないのである。

さて、具体的に多良間方言のアクセントの弁別特徴を述べる段となった。(2)の文頭の例では、有核の韻律語の次末位（後ろから 2 番目）の直後に下降が見られ、次末位に「下げ核」を置く解釈が可能に見えるが、文中で低く始まって現れる場合では全く異なる実現になる。(10)は C 型 [kada]a=kara... 《遠くから》に続く例である。



(10) 文中（単純語=助詞，複合語=助詞）の例<sup>7</sup>

- A ...kuba=mai miiraiL 《クバも見える》 ...kuba+gii=mai miiraiL 《クバ木も見える》  
 (kuba) (mai) (mii) (raiL<sup>∨</sup>) (kuba) (gii) (mai) (mii) (raiL<sup>∨</sup>)
- B ...mami=mai [miirai]L 《豆も見える》 ...mami+gii=[mai miirai]L... 《豆木も見える》  
 (mami) (mai<sup>∨</sup>) (mii) (raiL<sup>∨</sup>) (mami) (gii<sup>∨</sup>) (mai) (mii) (raiL<sup>∨</sup>)
- C ...adaN=[mai miirai]L 《アダンも見える》 ...adaN+[gii=mai miirai]L 《アダン木も見える》  
 (adaN<sup>∨</sup>) (mai) (mii) (raiL<sup>∨</sup>) (adaN<sup>∨</sup>) (gii) (mai) (mii) (raiL<sup>∨</sup>)

（複合語の例は青井 2019 を参照）

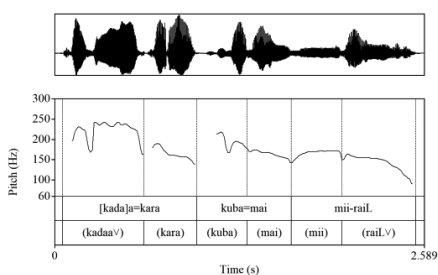


図 1 文中 A: ...kuba=mai miiraiL

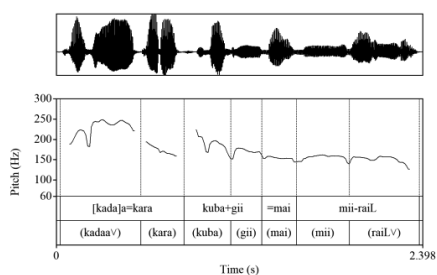


図 2 文中 A: ...kuba+gii=mai miiraiL

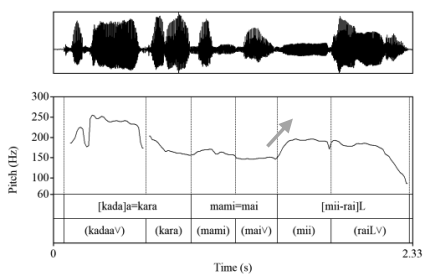


図 3 文中 B: ...mami=mai miiraiL

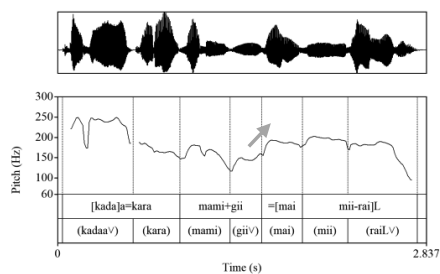


図 4 文中 B: ...mami+gii=mai miiraiL

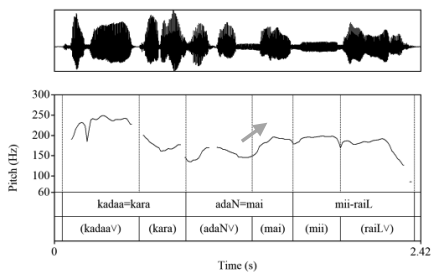


図 5 文中 C: ...adaN=mai miiraiL

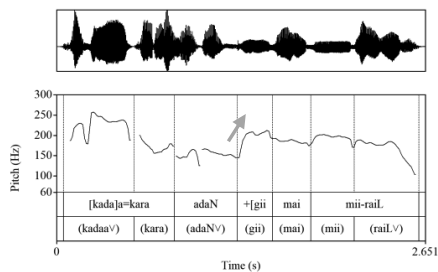


図 6 文中 C: ...adaN+gii=mai miiraiL

文中の当該韻律語（単純語、複合語とも）では、A型の文中部分は、自然下降に従いながらすべて低く平らに現れ（図1, 図2）、B型の文中部分は、図3の単純語（mami）では（mai<sup>▼</sup>）のあと上昇（図3矢印）、図4の複合語 mami+gii では、giiの有声子音部分のピッチの低下があるものの、（gii<sup>▼</sup>）のあとではっきりした上昇がある（図4矢印）。C型の文中部分は、図5, 図6では（adaN<sup>▼</sup>）のあとで顕著な上昇（図5, 6矢印）が現れる。すなわち、B型C型とも有核の韻律語の末尾後に「上昇」があるのが確認できる。「上昇」の有無とその位置が、kuba, mami, adaNを含む文例で異なることから、それぞれが音韻的に対立し、異なるアクセント（型）が実現したと見なされる。なお、C型の [kada]a=kara... 《遠くから》、韻律語（kada<sup>▼</sup>）（kara）のような有核のあとに続く場合ではなく、A型の [ui=kara... 《上から》、韻律語（ui）（kara）のような無核の韻律語が前にきて当該韻律語がHのまま続く場合は、(2)と同じ現れ方になる。

先に見た(2)と今回の(10)をまとめると(11)のようになる。○で囲んだ有核韻律語の末位モーラに「常にL」という「アクセント低核」(▼)を指定することで、下降・上昇の二つの音調変動の違いをまとめて表現できる<sup>8</sup>。

(11) 有核韻律語の下降と上昇のまとめ

- a. (... H] (L<sup>▼</sup>) (L...) (2) 文頭、あるいは文中でHから続く有核韻律語  
 b. (... L (L<sup>▼</sup>) (H...)) (10) 文中でLから続く有核韻律語

(11b)については、韻律語末の核のあるLのモーラから次のモーラを上げようとする「上げ核」（あげかく）と性質が似ている。「上げ核」の方言としては、山梨県奈良田方言アクセントがそれに該当する（上野1975, 1977）。ほかに埼玉県久喜・菖蒲方言、東京都神津島方言に「上げ核」が存在するという（Uwano 2012）。しかし、(11a)のように核のモーラを低くし逆行的に前のHから下っていく「降り核」（くだりかく）は、日本語・琉球語では未だ完全なものを見いだせてない<sup>9</sup>。

## 2.6 韻律語の環境的変異形

アクセント低核はそれが置かれたモーラが常に低く実現するが (...L<sup>▼</sup>)、有核の韻律語は2種の環境的変異形をもつと考えることができる。有核の韻律語が文頭に置かれた場合、もしくは文中で前の韻律語が高く終われば、それに続く核のある韻律語も高いトーンをもち、(H)L<sup>▼</sup>), (HH)L<sup>▼</sup>), (HHH)L<sup>▼</sup>)のように実現する。他方、有核の韻律語が文中で現れ、その前の韻律語が低く終われば、当該韻律語も低いトーンをもち、核のあるモーラの次のモーラを上昇させる。すなわち(LL<sup>▼</sup>), (LLL<sup>▼</sup>), (LLLL<sup>▼</sup>)のように実現する。東京方言のような「下げ核」が次を下げる力を有すると考えるのと同様に、この「低核」も上昇の場合、次を上げる作用が順行的に働く。

これら2種は環境の変異形であり、下降と上昇が同時に現れるのではなく、環境に依存して選択的に現れるのである。無核の韻律語 (HH), (HHH), (HHHH) あるいは (LL), (LLL), (LLLL)も同様の環境に依存している。これらの変異をまとめると(12)のようになる<sup>10</sup>。

(12) 韻律語の変異形

有核	H 韻律語・H 有核	L 韻律語・L 有核
(μμ)*	(H)L <sup>ν</sup>	(LL) <sup>ν</sup> [
(μμμ)*	(HH)L <sup>ν</sup>	(LLL) <sup>ν</sup> [
(μμμμ)*	(HHH)L <sup>ν</sup>	(LLLL) <sup>ν</sup> [
無核	H 韻律語・H 無核	L 韻律語・L 無核
(μμ)	(HH)	(LL)
(μμμ)	(HHH)	(LLL)
(μμμμ)	(HHHH)	(LLLL)

韻律語の変異を有核・無核の特徴のみでまとめると、(μμ)\*, (μμμ)\*, (μμμμ)\*, vs. (μμ), (μμμ), (μμμμ) のように抽象的に表すことができる。最初に (1) であげた A 型 B 型 C 型のそれぞれの型は次の (13) のように表すことができる。さらに 2 番目に副韻律語が来ることが求められているのは B 型だけなので、A 型, C 型については 2 番目の韻律語を省略し, (14) のように表すことができる。

(13) 有核・無核からみた三型体系 (二つの韻律語で表した場合)

A 型	(...μ) (...μ)	無核
B 型	(...μ) (...μ)*	主韻律語に接続する副韻律語が有核
C 型	(...μ)* (...μ)	主韻律語が有核

(14) 有核・無核からみた三型体系

A 型	(...μ)	主韻律語が無核
B 型	(...μ) (...μ)*	主韻律語に接続する副韻律語 (斜体) が有核
C 型	(...μ)*	主韻律語が有核

(14)で示したアクセント体系は、3 パターンを生み出す体系としては、最も単純で設定に無理がなく、実在可能性が高い体系といえる。一般にアクセントの情報は語根に備わっているというのは、異論のないところであろう。この方言では語根に含まれるアクセント情報はアクセントの型に関するものであるが、実際は、語根を含む韻律語が無核であるか (A 型)、その韻律語が有核であるか (C 型) の主要 2 パターンと、その韻律語に隣接するアク

セント指定をもたない韻律語（副韻律語）に核が現れるパターン（B型）を併せて3パターンを成している。

多良間方言とは別タイプの方言において、アクセント情報が含まれる1番目の主韻律語から離れた3番目以降の韻律語に何らかの音調指定を行うパターンを想定するのは、上記の完全体の3パターンのセットに比べて、いびつな体系を成しているといえる。というのは、主韻律語のあとの2番目3番目に主韻律語がきたとき、そのアクセント情報は無視されるのか無視されないのか、1番目の韻律語が指定する音調パターンの実現のために、2番目3番目の韻律語のアクセント情報が無視されるならその理由が必要であるし、無視されないならさらにその次に続く2番目3番目の韻律語への適用を何う複雑な手続きが必要になってくる。宮古諸方言の多良間以外の他方言のアクセントを分析するとき、一応、(14)で示した三型体系に収まらないか、作業仮説として念頭に置く価値はあると考える。

## 2.7 文アクセントへの適用例

多良間方言の文アクセントは、これら4種の変異形を組み合わせて、記述することができる。(15)~(19)では、主韻律語の型の指定を $\sqrt{A}$ 、 $\sqrt{B}$ 、 $\sqrt{C}$ のように表す。3段目には韻律語と低核の表示、4段目は大まかな音調型をH、Lの2段階と音調の方向を],[で表示、5段目は(12)で示した変異形の名前を略号（H有=H有核、L無=L無核など）で付す。

- (15)  $\sqrt{C}$ kadaa=kara  $\sqrt{B}$ mami+gii=**mai**  $\sqrt{B}$ mii-raiL

《遠くから豆木も見える》

(kadaa <sup>√</sup> )	(kara)	(mami)	(gii <sup>√</sup> )	(mai)	(mii)	(raiL <sup>√</sup> )
HH]L	LL	LL	LL[	HH	HH	HH]L
H有	L無	L無	L有	H無	H無	H有

- (16)  $\sqrt{A}$ ui=**kara**  $\sqrt{C}$ adaN+gii=**mai**  $\sqrt{B}$ mii-raiL

《上からアダン木も見える》

(ui)	(kara)	(adaN <sup>√</sup> )	(gii)	(mai)	(mii)	(raiL <sup>√</sup> )
HH	HH	HH]L	LL	LL	LL	LLL
H無	H無	H有	L無	L無	L無	L有

- (17)  $\sqrt{C}$ kinuu=**mai**  $\sqrt{C}$ upusju+**gami=u**  $\sqrt{C}$ katamii-butal

《昨日も海水甕を運んでいた》

(kinuu <sup>√</sup> )	(mai)	(upusju <sup>√</sup> )	(gamiu)	(katamii <sup>√</sup> )	(butal)
HH]L	LL	LLL[	HHH	HHH]L	LLL
H有	L無	L有	H無	H有	L無

(18)  $\sqrt{B}j\text{aa}=\text{Nkee}$   $\sqrt{C}kiiba=\text{du}$   $\sqrt{C}tokee=\text{nu}$   $\sqrt{C}nee\text{N}$   $\sqrt{C}narii\ \text{taL}$

《家に来たら時計が無くなっていた》

(jaaN) (kee<sup>v</sup>) (kiibadu<sup>v</sup>) (tokeenu<sup>v</sup>) (neeN<sup>v</sup>) (narii<sup>v</sup>) (taL)

HHH H]L LLLL[ HHH]L LLL[ HH]L LL

H 無 H 有 L 有 H 有 L 有 H 有 L 無核

(19)  $\sqrt{B}j\text{aa}=\text{Nkee}$   $\sqrt{C}mudurii$   $\sqrt{C}kiiba=\text{du}$   $\sqrt{C}tokee=\text{nu}$   $\sqrt{C}nee\text{N}$   $\sqrt{C}narii\ \text{taL}$

《家にもどり来たら時計が無くなっていた》

(jaaN) (kee<sup>v</sup>) (mudurii<sup>v</sup>) (kiibadu<sup>v</sup>) (tokeenu<sup>v</sup>) (neeN<sup>v</sup>) (narii<sup>v</sup>) (taL)

HHH H]L LLLL[ HHH]L LLLL[ HH]L LLL[ HH

H 無 H 有 L 有 H 有 L 有 H 有 L 有 H 無

(18) の例に (mudurii<sup>v</sup>) 《もどり》を挿入すると、(19) のようにその後の音調型が逆転する現象が見られるが<sup>11</sup>、これまで述べた原理によって、この現象は予測できる。

### 3. 韻律語の変異とイントネーション

イントネーションについては、調査分析がまだ不十分であるが、韻律語の変異に関わるプロミネンスの一現象について以下に述べる。

(20) は強調等がかからない落ち着いた状態の発音である。kaka 《遠方》は C 型、waaL 《来るの尊敬》は有核動詞で、ここでは次にくる副韻律語 taL が有核になる B 型とみなす (セリック 2020a を参照)。waaL の次の taL は「L 有核」で文末に来ており、LL の核の実現が見られない。(20) の音調型は kadaa ではやや下降の遅れが見られ、その後は HL の 2 段階の表記では L の連続で表記しているが、実際は少しずつ末尾に向かって下がる自然下降 (declination) が見られる (図 7)。

一方、(21) のように、「H 韻律語・有核」(H 有核) (kadaa<sup>v</sup>) 《遠方》に「強度強調」がかかると、韻律語末の母音 a が余分に延伸され (<A>で表す)、プロミネンスを置いた韻律語は、あたかも「L 韻律語・有核」(L 有核) のような形で現れる。なお、文末には、韻律語を一段階高くする「驚き」のイントネーションがかかり、(taL) は「H 韻律語」のように全体が高く、下降のない形で現れている (図 8)。

(20)  $\sqrt{C}k\text{adaa}=\text{kara}=\text{du}$   $\sqrt{B}w\text{aaL}-\text{taL}$

《遠方からぞ いらっしやった》(通常形)

(kadaa<sup>v</sup>) (karadu) (waaL) (taL<sup>v</sup>)

HH]L LLL LLL LL

(21)  $\sqrt{C}$ kadaa<A>=kara=du  $\sqrt{B}$ waaL-taL

《遠方からぞ いらっしやった》(プロミネンス形)

(kadaa $\sqrt{V}$ <A>) (karadu) (waaL) (taL $\sqrt{V}$ )

LLL $\uparrow$ H      LLL      LLL       $\uparrow$ HH

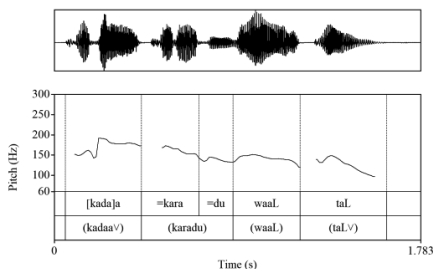


図 7 kadaa=kara=du waaL-taL (通常)

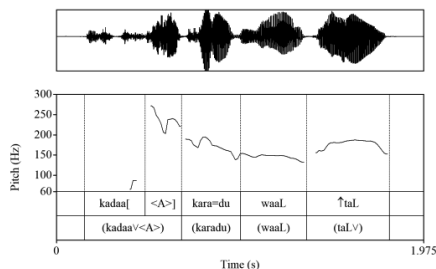


図 8 kadaa=kara=du waaL-taL (プロミネンス)

(21) の発声の様子をもう少し記述すると, **kadaa<A>** の始まりは極めて強い呼気のささやき (whisper voice) あるいは無声の息漏れ音 (breathy voice) で現れ, 第 2, 3 モーラ目の **daa** では, 低音調に伴う咽頭摩擦的なうなり声が現れる。この **kadaa** 部分は図 8 では, ほとんどピッチを捕捉できない。その後, 延伸された母音<A>の直前で急激に大きく上昇し, <A>の部分だけが卓立する。この部分については, (21) では一つの韻律語 (**kadaa $\sqrt{V}$ <A>**) と表記したが, **kadaa** の部分が「L 有核」の韻律語として独立し, (**kadaa**] (<A>)) のように **kadaa** 自体が L のまま持続し, 次 (延伸部分) を H にしているようにも見られる<sup>12</sup>。

強度強調は, 弁別特徴である音調の動きの幅を押し広げることがよくあるが, この場合は, 弁別特徴として「上昇」が実現し, 延伸部分への「上昇」の幅が極端に広げられた形をとっている。さらに興味深いのは, 次の韻律語 (**karadu**) 《からぞ》が「L 韻律語」であることである。**kadaa** の「L 有核」の核である「上げ核」によって一旦上昇した場合, 次に「H 韻律語」が来ることが期待されるがそうになっていない。結局, イントネーションによって現れた韻律語 (**kadaa**) の「L 有核」に類したものは, あくまで「H 有核」の「代替的韻律語」であると言える。

ここでの注目すべき点は, イントネーションの作用によって, 2 種の変異形である「H 韻律語」と「L 韻律語」とは交替するという事実である。(21) のように, 文頭でも「L 韻律語」(に類するもの) が現れうるというのは, 文頭が H から始まることや文頭の有核の韻律語には必ず下降があることが, 不変の特徴ではないことを物語っている。

今後, イントネーションによる代替的韻律語にどのようなものがあるのかを調べるのはこれからの課題である。

#### 4. おわりに

以上、多良間方言のアクセント解釈に関して、「アクセント低核」、また韻律語の変異形を中心に見てきた。ここでの研究は、2010年以降に行われた琉球語研究者の研究成果に負うところが多い。あえてこの論考の特長をあげれば、(a) この方言において、韻律語に2種の環境的変異の考えを取り入れたこと、(b) 韻律語に副韻律語を設けて文節の縛りを解いたこと、(c) 有核・無核の韻律語の並びによって、ほぼ文音調の全てが予想できるようになったことである。特に (b), (c) については、今後、他の宮古諸方言アクセントを分析していく際にも、この方法の汎用的な有効性が期待できる。

今後の研究の展望として、多良間方言のような「三型アクセント体系」が宮古諸方言のなかでどれだけの広がりを見せているか興味を持たれる。特に、「上昇」に注目した観点で改めて諸方言の音調を見直す必要があるだろう。比較的研究が進んでる池間方言に関しても、「上昇」に注目した見方をすると多良間方言との共通性が見えてきている（新田 2022）。また、もっとも自然な三型体系の在り方について言及したが、他の宮古諸方言がこの原則に則っているのか検証が必要であろう。調査の際には、単純語だけでなく複合語や、多種の助詞や助詞連続を付けた形式、また文頭の音調型のほかに、観察の対象となる形式が文中に入ったときに見られる特徴は何か考えていく必要があるだろう。すべて今後の課題とする。

#### <付記>

この研究は、科学研究費補助金、課題番号：20H01259「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」によってなされた。話者の渡久山春英氏に感謝申し上げる。

#### <注>

- 1 話者は多良間村仲筋出身の渡久山春英氏（1936年生）である。経歴は渡久山春英・セリック ケナン（2020）に詳しい。
- 2 用例で用いる音韻表記のうち、N, M, Lなどのキャピタルは1子音で1モーラを形成する音、特にLはそり舌の[ʎ]の成節的モーラである。ただし日本語の促音のような重子音はff, vv, ss, zzのように表記する。iはいわゆる「舌先母音」で、pi, bi, ki, giのとき摩擦的雑音を伴う。音韻表記のボールド（太字）は、そのセグメントがH（高）の音調、非ボールドはL（低）の音調か、指定なしである。アクセント核による下降を ] , 上昇を [ , イントネーションによる下降を ↓ で、上昇を ↑ で表す。
- 3 文例の kuba はヤシ科の植物、ピロウ。葉は扇、笠などの材料となる。adaN はタコノキ科の植物、琉球列島に広く分布する。葉は裂いて箆、蓆、草履などの材料になる。宮古諸方言の複合語は生産性が高く「～の木、～という植物」という意味で+giiの複合語を形成する。

- 4 副韻律語は、古典ギリシア語の *enclisis* (前倚辞 (前に依存して *host* に後接する後接語)) に似る (高津春繁 1960, 44ff.)。それ自体アクセントを持たずアクセントのある語の後ろに連続する語である。また副韻律語は、助詞類は一般に核を持たないという N 型アクセントにおいて想定されている仮説に基づくものであるが (上野 2012), 条件によっては副韻律語が有核になる場合がある。
- 5 *mjuutu-ra* は《夫婦ら》であろう。 *utudara* は渡久山・セリック (2020) では「親戚。親類。一門。親族。姻族」とある。
- 6 アクセント以外のイントネーションによる卓立は、この韻律語の単位を反映して現れるという仮説が提示されている。卓立イントネーションによって *taL* をひと塊として卓立することがあるという指摘がある (詳細は新田 (2021))。
- 7 *miiraiL* 《見える》の音調型はここでは問題としないが、(*raiL*<sup>v</sup>)のように低いトーンをもつ有核韻律語 (のちにいう「L 有核」) が文末に来たとき、下降も上昇も現れないことを前もって指摘しておく。
- 8 青井 (2019)では、筆者が定めた下降と上昇を兼ね備えた「アクセント低核」について、上昇下降の振る舞いに一貫した説明ができていないこと、また音調の際立ちの面で、*gazi*[*ma*[*gii mai* 《ガジュマル木も》)のようなくぼみの音調が実際には現れていないことへの批判があるが、「アクセント低核」の本質を十分に理解しているとは言い難い。後述するように... $\mu$ ]と  $\mu\mu$  [...]の両者は、別の環境で現れる環境的変異形であって、音調の下げと上げが 1 モーラ分挟んで共存することは決してない。青井 (2019: 7ff.)では、この方言で現れる「下降」はデフォルトの H 音調と低核の L 付与であっさりと説明し、特に「上昇」について丁寧な議論がなされている。上昇は説明の道具立てとして「L 音調拡張規則」と「L 音調削除規則」を用いる。後者は LL が二つ重なったとき、右側の L が削除される \*LL OCP (Obligatory Contour Principle, 義務的曲アクセント原理。LL\*の \*はアクセント核ではなく、LL が不可能という意味) に基づくものだという。これは LL の連続を義務的に回避する異化の一種である。LL が現れると指定の L が解除され (「L 音調削除規則」), それによってデフォルトの H が現れるとしている。具体例で示すと、文中で低く続く C 型の...*adaN*\* *gii mai*...の場合、「L 音調拡張規則」によって L 音調のまま *adaN*\*の末尾の核の前まで来て、そこで出会った *adaN*\*の語末の L 指定 (低核) が LL\*連続回避の異化によって解除されて (「L 音調削除規則」), 次のモーラからデフォルトの H が出現し、*gii mai*...を H にするという説明である。青井氏の立場では、H の連続はデフォルトの現れなので特別な措置は必要ないが、L が連続することについては、「L 音調拡張規則」という特別な規則が必要になる。また音調実現の範囲に「韻律句」の縛りがあるので、それを越えるときには規則が必要になってくる。方向観を採用する伝統的なアクセント論においては、核によって一旦下がった音調がその後低いまま音調が連続することは極めて一般的であるのと対照的である。青井氏の言う「L 音調拡張規則」によって実現した L の連続は嫌われず、L 指定があるときだけ LL が回避される理由が筆者には理解できない。また、青井氏自身も問題にしているが、L 音調削除規則がかかる LL の右側の L がそのままデフォルトの H に換わるのではなく、次のモーラから H が出現する点も問題として残る。さらに青井氏の説明で前提としている H 音調がそもそもデフォルトかどうかとも疑わしい (3 節も参照)。文頭においてプロミネンスがかからない“通常の”発話の場合をデフォルトに据える考えもあるが、むしろ文頭はいわゆる句頭のイントネーションがかかる特殊な位置と認識すべきである。いま仮に異化が起り、L 指定の解除が起きたとしても、次の H が遅れて現れる理由を見つめるのが難しいと考える。イントネーションを含めた種々の音調の観察から、韻律語に備わる「上げ」には「下げ」に比べて固定的で積極的な働きが窺える。たとえば、C 型 *adaN gii* の言い切りは、[*ada*]N *gii*。~[*ada*] *gii*。どちらも現れうるのに対して、文中の...*adaN* [*gii*]の上昇は一定でゆるむことはない。さらに [*i*]mi-sjaaL 《小さい》に対して、[*taka*]-sjaa 《高い》のように *taka* の *ta* の母音が無声化する環境では下降が 1 モーラ後ろにずれるのに対して、文中では、...imi[sjaaL, ...taka[sjaaL のように語根のあとの *sjaaL* が高くなることは一定している (両方とも語根に核がある (imi<sup>v</sup>) (sjaaL), (taka<sup>v</sup>) (sjaaL)と解釈される)。日本語・琉球語内でのアクセントの類型からみると、上昇の「上げ核」よりはむしろ、指定し



た位置に向かって、前のモーラから下降してくる「降り核」の方が問題を含む。池間方言との比較から両方言の祖形を考えると、上昇の方が通時的にも古く、のちの時代に多良間方言では低く連続する前部分が核の位置を除いて高くなる変化が起きたと推定される。すなわち L 韻律語と「上昇」の方が、歴史的にも本来的な形で、現在の H 韻律語と「下降」はその後の歴史的変化によって成立したという仮説が成立しうるのである。多良間方言の「上昇」について、最近の松森 (2022) による基本音調として LH を設定することには同意し得ても、異化によってデフォルトの H の出現させる \*LL OCP という特別な操作は、共時的にも通時的にも適当とは言えないと考える。

- 9 「降り核」(くだりかく) は現代日本語の諸方言では、いくつかの方言の音韻解釈に用いられたことがあるものの (上野 1977), いわゆる「低起式」の式特徴を「降り核」を用いてマークし、また「下げ核」と併用して用いられているものばかりである。「降り核」1 種のみで解釈される方言は見つかっていない。ただし児玉 (2017) のように本土方言の祖体系の変化プロセスに「上げ核」から「降り核」への変化を想定する研究もある。
- 10 これまで、韻律語の有核・無核の区別に関して、アクセント核を韻律語の外に出して表記するのか、韻律語の中のモーラに付して表記するのか迷いがあったが、以後、多良間方言の「アクセント低核」のように、韻律語の末位モーラに現れるという「位置の内容」、かつそのモーラを低くするといった「音調実現の具体的内容」を示す場合は、韻律語の中に表記する。それに対して、その韻律語自体が抽象的なレベルで有標か無標か (すなわち有核・無核) のみを示す場合は韻律語の外に記すことにする。韻律語の括弧外の表記を採用する理由は、他方言との比較において有益と考えられるからである。例えば池間方言は「上げ核」で解釈するといろいろな音調現象がシンプルに説明可能であるが (新田 2022), 抽象的な有核・無核で表すと、「A: 無核, B: 2 番目の韻律語が有核, C: 1 番目の韻律語が有核」となり、多良間方言との共通性が明らかとなる。
- 11 例の (18) と (19) は、仲筋の隣の多良間村塩川方言の例。松森晶子氏提供。なお, jaaNkee 《家に》の方向格 Nkee は形態上 jaa=Nkee と切れるが、韻律語では(jaaN)(kee)となる。五十嵐 (2015) を参照。
- 12 プロミネンスを置いた (21) のような形が、「L 韻律語」であって「H 韻律語」の強調形式ではないと判断したのは、延伸部分<A>の直前や, kadaa の語末長母音の内部で「下降」が現れてこなかったからである。第 1 モーラが低く、無声の息漏れ声やうなり声で始まる特殊な発声を伴いながらも、仮にその韻律語が「H 韻律語」ならば、延伸部分も含めて、その韻律語内部のどこかに下降があるはずである。例えば, ka[da]a <A> ~ ka[daa] <A> のように。ここではそのような形で現れていない。

## <参考文献>

- 青井隼人 (2012) 「宮古多良間方言の三型アクセント体系」『2012 年度第 26 回日本音声学会全国大会予稿集』7-12.
- 青井隼人 (2015) 「多良間方言の三型アクセント」『2015 年度第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』202-205.
- 青井隼人 (2016a) 「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」博士学位論文, 東京外国語大学.
- 青井隼人 (2016b) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇の記述」『日本言語学会第 153 回全国大会予稿集』76-81.

- 青井隼人 (2016c) 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント: その特徴と型の中和」『音声研究』20(3), 76–81.
- 青井隼人 (2017) 「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13, 1–23, 国立国語研究所.
- 青井隼人 (2018a) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇: 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』14, 1–27.
- 青井隼人 (2018b) 「南琉球宮古多良間方言のアクセント規則」日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会レジュメ (大東文化大学 2018 年 6 月 22 日) .
- 青井隼人 (2019) 「南琉球宮古多良間方言における欠性的低音調」『音韻研究』22, 1–10.
- 麻生玲子・小川晋史 (2016) 「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150, 87–115.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文学文化研究』1-42, 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150, 33–57.
- 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(2), 134–138.
- 上野善道 (1975) 「アクセント素の弁別特徴」『言語の科学』6, 23–84.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 5 音韻』281–321, 東京: 岩波書店.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1–42.
- 上野善道 (2010) 「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道監修『日本語研究の 12 章』504–516, 東京: 明治書院.
- 上野善道 (2011) 「「上げ核」の由来—奈良田アクセントの成立過程—」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』614–599, 東京: おうふう.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44–62.
- 高津春繁 (1960) 『ギリシア語文法』, 東京: 岩波書店.
- 児玉望 (2017) 「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ: 熊本大学言語学論集』16, 7–12, 熊本大学言語学研究室.
- セリック ケナン (2020a) 「南琉球多良間仲筋方言の動詞アクセント体系の記述」『日本方言研究会 第 110 回研究発表会発表原稿集』(オンライン 2020 年 5 月 15 日) 25–32.
- セリック ケナン (2020b) 「南琉球宮古語水納島方言のアクセント体系と基礎語彙」『琉球の方言』45, 243–281.
- 渡久山春英・セリック ケナン (2020) 『南琉球宮古語 多良間方言辞典』国立国語研究所.
- 新田哲夫 (2012) 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1), 63–79.
- 新田哲夫 (2018) 「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」国立国語研究所共同研究プロ

- プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第2回合同研究発表会レジュメ  
(国立国語研究所 2018年2月18日)
- 新田哲夫 (2021) 「南琉球多良間方言のアクセント体系と文末音調」『日本方言研究会 第112回研究発表会発表原稿集』(オンライン 2021年5月22日) 25–32.
- 新田哲夫 (2022) 「南琉球池間方言アクセントの動的音韻解釈」音韻論フェスタ 2022 (オンライン 2022年3月7日)
- 平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』56, 61–73.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 広戸惇・大原孝道 (1953) 『山陰地方のアクセント』平田: 報光社.
- 松倉昂平 (2018) 「福井県坂井市三国町安島方言の三型アクセント: 付属語のアクセントと型の中和」『国立国語研究所論集』14, 99–123.
- 松倉昂平 (2019) 「福井県北潟方言の後部3拍複合名詞のアクセント—「式保存」が成り立たない共時的・通時的背景—」『日本語の研究』15(2), 35–51.
- 松倉昂平 (2022) 『福井県嶺北方言のアクセント研究』(日本語学会論文賞叢書 3) 東京: 武蔵野書院.
- 松倉昂平・新田哲夫 (2016) 「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3), 81–94.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道監修『日本語研究の12章』490–503, 東京: 明治書院.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における3型アクセント体系の発見」『国立国語研究所論集』6, 67–92.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63, 13–36, 日本女子大学文学部.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要 文学部』64, 55–92, 日本女子大学文学部.
- 松森晶子 (2016a) 「多良間島における文のプロソディー: 韻律句が連なる場合の音調交替現象について」国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」キックオフワークショップ (国立国語研究所 2006年1月11日)
- 松森晶子 (2016b) 「八重山諸島黒島方言のアクセントの仕組み—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』150, 59–85.
- 松森晶子 (2016c) 「声調言語としての宮古祖語—特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について」田窪行規則・ジョン・ホイットマン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語: 日琉祖語の再建に向けて』149–169, 東京: くろしお出版.
- 松森晶子 (2022) 「宮古諸方言における「韻律領域」の拡張と多良間島のプロソディー」国立国語研究所共同プロジェクト「日本語・琉球諸語方言におけるイントネーションの多様性のための実証的研究」研究発表会 (オンライン 2022年5月28日).
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Hayashi Yuka & Tomoyuki Kubo (2018) “Tonal neutralization in

- the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan,” Kubozono, H. & Griko, M. (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, De Gruyter Mouton, 83–128.
- Matsumori, Akiko (2001) “Historical Tonology of Japanese Dialects”. Shigeki Kaji(ed.). *Proceedings of the Symposium: Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Japanese Accentology, and Other Topics*, 93–122. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA): Tokyo University of Foreign Studies.
- Matsumori, Akiko (2017) “Prosodic units and phonological processes of the Miyako-jima and Tarama-jima systems in Miyako Ryukyuan”. JK Workshop on ‘Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean’: Center for Korean Studies, University of Hawaii at Manoa.
- Shimoji, Michinori (2009) “Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan”. *Gengo Kenkyu* 135, 85–122.
- Uwano, Zendo (2012) “Three types of accent kernels in Japanese”. *Lingua* 122, Issue 13, Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems, 1415–1440.